

語らない復員者たち（中）：玉音放送の風景と井伏鱒二「遥拝隊長」

内田，友子
九州大学大学院比較社会文化学府博士後期課程三年

<https://doi.org/10.15017/8365>

出版情報：九大日文．2， pp.138-145， 2003-02-28．九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

語らない復員者たち (中)

——玉音放送の風景と井伏鱒二「遙拝隊長」——

UCHIDA TOMOKO
内田 友子

現在五八歳以下の人は誰一人として、玉音放送の風景を見ていない。そのたった五分間ほどの放送を境に、日本国じゅうの価値観はたちまち覆され、日本国民の目からは残らずウロコがひき剥がされた——そんな衝撃的でドラマティックな光景を思い描いてしまう者にとっては、たとえば、玉音放送がナマ放送ではなかったこととか、八月一日が実は「終戦日」ではないということを知らされると、何だかだまされたような、興ざめたような気分になるものだ。

戦後の「当村大字笹山」において、「こうちがめげれる」原因をたびたびひきおこす「遙拝隊長」岡崎悠一や、また「未復員」と呼ばれる人々は、あの日にウロコが剥がれないまま、言わば「境」の日をうまく跨げないまま、戦後の社会を生きている。この、一見、戦後社会にうまく溶け込むことができない復員者たちについて、実は彼らは自他共に破綻を招かずにすむ生きかたを獲得し得たのではないかという仮説を、本稿では前回立てた。この仮説は、次のように言いなおすことができる。つまり、戦後社会にうまく溶け込むことのできた——悠一のように精神に異常をきたすことなかった——多くの人々は、みな何らかの破綻を抱かねばならなかったのではないかと。

たとえば、「玉音放送」の九日前には広島に、六日前には長崎に、原爆は投下されていた。「屍の街」⁴の中で大田洋子は、知人の医師宅で日本降伏を知り、「云い難い空しさ」に「脚がぶるぶる震え」、「原子爆弾と終戦と、二つのどんでん返しをどのように理解したらいいのか」と眠れぬ夜を過ごす。また林京子は、原爆で息子を失った伯父が「震える唇をかんで」八月一日のラジオ放送を聞き、「なして、もっと早う言うてくれん」と「声の主に恨みを言った」ことが忘れられない、と「祭りの場」⁵に書いた。彼女たちが戦後、戦争体験の風化という現象や言説に時々刻々向き合わざるを得なかった苦悩は、その作品群に詳しい。その中で大田は精神を病み、林は自身の生活のベースが八月九日にあるという揺るがし難い自覚について、自らを「異常」だと断じた。

「玉音放送」をまともに跨いだその後に、自分が抱え込んだ破綻を補うため、人はさまざまな言葉が必要とするのではないだろうか。原爆の、戦災の、従軍の体験を語ることによって、破綻を修復しようと試みたのではないかと。

だとすれば、語らない人々は、どうだろう。語らない岡崎悠一は、何らかの破綻を抱えているのだろうか。自らの立場を判断し語るとは、いったいどういうことなのか。……というのが本稿を支える諸々の関心だ。今回は、語らない彼らが跨がなかったままの境界線「玉音放送」を、人々はどのように跨いでいたのか、その日その時の、さまざまな風景を探ってみよう。

以下、引用文中の漢字は旧字体から新字体に改め、傍線は内田による。

一、衝撃的で「平静」な風景

「降伏記念日から終戦記念日へ―記憶のメディア・イベント―」
の中で佐藤卓己は、「終戦記念日」の法的根拠にもとづく設定が、
終戦一八年後の一九六三年五月一四日に閣議決定された「全国戦
没者追悼式実施要項」、さらに八二年四月一三日に閣議決定された
「戦没者を追悼し平和を祈念する日」制定によるものであること
を知ったとき、それを意外に感じた自身の経験から、「国民一般が
八月一五日を「終戦記念日」と感じる根拠は、こうした法的決定
ではない」、さらに、「戦後生まれが多数を占める日本で「終戦の
記憶」は、新聞の報道やテレビの番組構成によって創られている
のではあるまいか」という問題を立ち上げた。

玉音放送はたしかに一九四五年八月一五日正午から放送された
が、天皇が朗読した「終戦の詔書」の日付は八月一四日である。
これは、ポツダム宣言の受諾を「御聖断」によつて最終的に決定
し、公的な回答として連合軍へ送ったのが一四日であることによ
る。天皇の「玉音」の収録作業も一四日午後一時過ぎに行なわ
れた。また、日本の「降伏」が公的に確定したのは、日本国政府
代表の重光葵と、大本営代表の梅津美治郎が東京湾上の戦艦ミズ
ーリ号において降伏文書に署名した、翌九月の二日である。いず
れにしても、八月一五日は確かに宙に浮く。しかし佐藤はこの日
の放送について、「国民的公共性の中核メディアとしてラジオが果
たした機能」を重視した。さらに、九月二日の敗戦日よりも「八
一五終戦記念日」がなぜメディア・イベントとして定着したのか、
その過程を新聞紙面で追いながら、今日まで続いているような「定
番化」は、「敗戦＝占領」の記憶を「終戦＝平和」に置き換えよ
うとする心性の下で進められた」と分析した。

「玉音」を電波に乗せることの効果については、竹山昭子も次
のように説明している。

（前略）大勢において日本人は敗戦を平静に受け入れたので
ある。それはなぜだったのか。家を焼かれ飢えに苦しむ国民
にもう戦う気力がなくなっていた、あるいは徹底抗戦を叫ぶ
軍部もすでに戦う武器を持たず戦争継続が不可能であること
を認めざるをえなかったということもある。だが、もつと
も大きな要因は、天皇自らが終戦の決定をラジオで放送した
という事実であつたといえよう。

『玉音放送』一〇頁

今日「定番化」しているメディア・イベントの中で私たちが度々
耳にする「玉音放送」は、雑音が多い上に採用されている語句が
難解で、正直、一度聴いただけでその内容を掌握するのは困難だ。
そこに、竹山は勅語の「有り難味」を認めた。

ところが戦前の日本人は、「勅語」とはこういうものだ、難
しい漢語の羅列で理解し難いものだとして了解していた。それば
かりか「難解だから有り難い」「わけはわからないが尊い」の
であつて、「勅語」が一般国民と同じ言葉を使つていては「有
り難味」が半減してしまうのかもしれない。極言すれば日本
国民にとってそれが「勅語」であることに意味があるのであ
つて、その内容ではなかつたとさえいえる。

（略）「詔書」に何が書かれていたかではなく「終戦の詔書を
天皇が読まれた」というその事実が、日本国民に唯一最大の
意味を持つたのである。

多くの国民は天皇直々の放送に驚愕するのが精一杯で、敗戦の
（『玉音放送』四三〜四四頁）

正当性を問うているところではなかった、というのがここに描かれている風景だ。今日まで「八月一日」が他の公的日付をさしおいて人々の記憶に深く根付いてきたのも、そのためだろう。

ところで、終戦翌年の一九四六年に創刊した「世界」誌上では、五〇年八月号から「敗戦の日の思い出」という体験談風の特集が登場する。当初は言論界の人物による執筆であったが、五五年八月号からは読者からひろく原稿を募り、毎年八月号恒例のいわゆる八・一五特集として定着してゆく。この応募形式の特集は、各人の戦争体験談という趣から、後には「私たちの生活と憲法」（五九年八月号）、「私と戦後の教育」（六一年八月号）などテーマに時事問題との関わりを持たせ、七五年まで続けられた。

当時の「玉音」の効果を確かめるべく、試みに、これらの「体験記」をめくってみる。

（略）この八月十五日の感想を書けと頼まれてから、十日を経たけれども、その日の印象は実に朦朧として殆ど捉へられない。天皇陛下のラヂオ放送がたしかあの日の正午にあつたのであるが、どこでどうして聞いたかも忘れてしまった。ただそのお声の弱々しく途切れがちだったこと、そのたどたどしい、お声の中に陛下の御苦衷を思つて涙を飲んだことは覚えて居る。しかしこの御声によつて伝へられた戦争終結の喜びは、その当座我々日本国民に無条件受諾に対する不安をも忘れさせた。

（安倍能成「八月十五日」／一九五〇年八月号）

陛下の御声は思ったよりずっと明るく、若々しく、御元氣らしいことが感じられ、先ずホツとした。厳肅だが、拝聴して

いて胸が苦しいという気持はしなかった。

（長與善郎「忘れ得ぬあのとき」／一九五〇年八月号）

これらは竹山が指摘するように、「玉音」のおかげで「平静に」事態を受け入れた人々であろう。しかし、まったく別の「平静」さで受け入れた人々も、いたのである。

二、奇妙に「平静」な風景

次に挙げるのは、井伏鱒二「黒い雨」¹⁰の最終章、玉音放送に際して「正統派に属するものであったとは云われ」ないとされる場面である。

僕の目にも涙が込みあげて来た。それを隠すため、食堂の入口にある手洗鉢で手を洗っていると、配膳を終った中年の炊事婦が僕のところへ挨拶に来た。

「閑間さん、ほんとにこのたびは、どうも何でございましたなあ」と丁寧にお辞儀をした。（略）

この炊事婦は泣いてはいなかった。僕の涙はもう引込んでいたが、正直なところ、それは今月今日正午すぎの涙として正統派に属するものであったとは云われまい。僕は幼いとき近所で遊んでいて、要市という背の高い半ば白痴の無法者によくいじめられた。それでも、その場で泣くのは我慢して家に逃げ帰り、お袋にねだつて拭いた胸元から出してもらった乳房を見ると同時に泣きだすのであった。いまだに乳の味が鹹っぱかったのを覚えている。ほつとした瞬間の涙であるが、今日の涙もそれと同じ種類のものではなかったかと思う。

この「僕」、主人公閑間重松は、八月六日に横川駅で被爆した後、

火焔に包まれた市内から決死の脱出に成功するが、その後、焦土と化した市内で「しくしく胃のあたりが差込んで」たまらず座り込んでしまうほど、惨状を幾度も目撃する人物である。その人物が、「今、そこに恐るべき重大事が言葉によって発せられる。怖いもの見たさの反対である。」と、放送を直接聴くことをあえて避けた上に、「終戦」の知らせに際して自分の流した涙を「正統派」ではないと感じる。では「正統派に属する」涙とは、いったい何だろう。「黒い雨」に描かれる、「玉音放送」をめぐるこんな奇妙な風景は果たして実際にあったのだろうか。

再び「世界」の八・一五特集をめぐってみる。次に挙げるのは、読者からの応募原稿である。

友だちの中には泣いているひともあったが、私はくやしいとよりはもつと複雑な思いがしていた。それは戦争も「やめられる」ものであったのかという発見であった。私には戦争というものが永久につづく冬のような（そんなものは実際にありはしないのだが）天然現象であり、人間の力ではやめられないもののような気がしていたのだ。それは愚かしい錯覚であったが、当時の私はそれほど政治について無知であり、国家には絶対に服従するものと考えていた。

（北山みね（主婦 三三歳）「人間の魂は滅びない」

／一九五五年八月号）

その私達の前に、突然私達には手もとどかぬような高い所から「戦争は終わった。戦争は負けたのだ。」という事が降つて来た。私達がこうしているのに、私達には断りもせず、前ぶれもなしに出て来たこの事態には、素直について行けないよう

な気持のまま夜に入った。

しかし、そうは言っても、私達にはその降つて湧いた事態に反抗しようとする積極的な気持もなかった。いつも大きな根拠となるスローガンを上から与えられ、それに向つてする生活だけが、不安のないものとして気分的にも肯定して来た私達は、「国の為に戦え」というスローガンを流していたその同じ所から、「既に戦争はすんだのだ」と聞かされた以上、それに反対する判断も勇氣も起きては来なかった。

（宮澤信子（主婦 二八歳）「地下工場の私たち」

／一九五五年八月号）

また中には、玉音を聴いても「終戦」に気付かなかったという体験記もある。弘前の歩兵部隊で連日「玉砕戦術」の訓練を受けていた「初年兵」は、次のように当時を語っている。

放送は、言葉遣いから、天皇のお声だと判つたが、その内容は全然聞き取れなかった。倒れまいとして歯を喰いしぼつているだけで、ただ放送が終るのを待ち焦れた。天皇の放送がすむと、部隊長の簡単な訓辞があつたが、勿論、それももうの空である。兵舎に帰つて、餓えた獣のようにガツガツ昼めしを喰つてから、やつと生き返つた気持だつた。

私は放送の内容を、無条件降伏のお言葉だとは、ゆめ思わなかつた。

（藤田靖夫（無職 二九歳）「蝸壺と星空」

／一九五五年八月号）

ちなみにこの藤田氏は、「ある人から、軍隊生活は最初の三ヶ月間だけあれこれと思考を廻らすが、三ヶ月を過ぎると思考力はすっかり減殺されてしまつて、命令と惰性のもとにするすると一年

や二年を過すものだ、と聞かされたが、私も入隊して一ヶ月もすると、その兆候が現われた」と当時を振り返っている。

これらの体験記では、「玉音」の効果などまったく度外視されている。妙な錯覚に気付いたり、積極的に事態を解釈する気が起こらなかったり、空腹のあまり「終戦」にさえ気付かなかった、という八月一五日の風景は、どれをとっても「玉音」がその効果を發揮したとは言えそうにない。なぜなら、ここでは「天皇」の存在感があまりにも希薄だからだ。閑間重松もだが、ここに挙げた体験記では「玉音放送」の向こう側にいるはずの「天皇」という存在に目を向ける者は、誰もいない。

三、「正統派」に属する風景

だとすれば、逆に「正統派に属する」涙がどのような風景で流されているのか、ということは考えやすい。たとえば、「戦争と天皇制は私にとって何なのか、どういう傷痕をのこしているのか、私はこの小説でそれをとらえようとした。」と「あとがき」で語られる、井上光晴『虚構のクレーン』(未来社、一九六〇年一月)では、次のような玉音放送の場面を見ることができると。

「騒がんでくれ、日本国民じゃないか、いつとき黙つていてくれ」といいながら、副長の横で総務次長が泣きだした。

「申し訳ない、申し訳ない」測量主任がそう叫ぶとウウウと耐えきれぬように机にうつぶした。

「陛下にすまない」副長がいった。

「副長つ」労務次長が叫んだ。

「すみません」「すみません」「すみません」という声が口々

につづいた。それらの声と涙を仲代庫男はどこか遠い舞台上で行われている俳優たちの劇をみているような思いできいた。この作品のように、「玉音放送」を聴いて、その向こう側に想定される「天皇」に対して涙を流すという場面は、一般の体験記に最も多く見られるパターンだ。

七時二十一分、特別に今日正午より、天皇陛下の御放送があることを告げる。いよいよ、陛下おんみずからのお言葉として事態を解決せられるのだ。陛下のお心を思い、思わず涙が出る。(略)

時報、つづいて、玉音をきく。ひとびとは肅然と頭を下げ、一瞬、街はしずかなこと、むしろさまざまの思いに胸が満ちる。

一語一語、玉音は心にしみわたり、涙が頬を伝う。今後はほんとに一所けんめいに、とにかく日本人同志の争うことのないように働かねばならぬこと、胸にしみて思う。働こう。

(吉沢久子『終戦まで』)

先に挙げた体験記の「もつと複雑な思い」や「素直について行けないような気持」という、戸惑いやぎこちなさはここでは見られない。ここから今日私たちが推測できるのは、「天皇」という(個人としてではなく、滅私奉公の精神を裏付けられる共同幻想としての)存在に自己同一化すること、それが当時の「正統派」であったということだ。たとえそれが戦後の価値観に照らした時、「どこか遠い舞台上で行われている俳優たちの劇」のようにしか見えないとしても、当事者たちに戸惑いやぎこちなさはなく、つまり彼らは自分の置かれた状況に対して矛盾や不安を抱くことはない。それが、井上が言うように、いずれは「傷痕」に形を変えるものであったとし

ても。

そんな彼らの正当性を今日的な観点から問うことが本稿の目的ではない。ただ、このような戦時中の自己同一化について、これが必ずしも遠い過去の特異な現象として傍観できる性質のものではない、ということをごこでは確認しておきたいのだ。

たとえば、近年マスコミで騒がれた社会問題のひとつを挙げてみても、私たちはその状況を身近に類推することができる。新興宗教への狂信的な傾倒とそのためひきおこされた異常な事件について、理解に苦しむという感想で片付けるのは簡単だ。しかしその事件の被害者側から、「信者がマインドコントロールされるといふ感覚も、わからないではない」といふ言葉が発せられたとき、私たちはかつての日本を丸呑みにしていた軍国主義のような、またそれに似たような「理解に苦しむ」状況が、実は常に手元にひきよせられる距離にあるということをごこを認識するのだ¹³。

四、風景の外側で

吉永春子著『さすらいの〈未復員〉』で取材されている〈未復員〉たちに共通しているのは、戦時中に「発症」して入院し、病院の中で終戦を迎えていること、従軍中のことをたずねると、上等兵にひどく殴られた、「弾が、ピューピュー飛んで」きた、という「怖かった」体験以外のことは明確に答えないことである。どのような体験が彼らの「発症」につながったのか、原因については同書で説明されていない。しかし、戦後なお東方遥拝や軍人勅諭の暗唱をくりかえし、従軍体験の慣習から脱しきれずにいるとされる彼らではあるが、では「終戦」を認識していないのかというところ、

それは保留事項のようである。著者の吉永は、ある〈未復員〉へのインタビューの中で次のようなやりとりを行なった。

—坂さん、戦争の時、誰の為に戦ったの？

彼はそつと毛布から顔をのぞかせた。

「……国の為」

思いもかけず大きな声だった。

—天皇陛下の為は？

坂さんは、微かに笑いながら、皮肉っぽく口をゆがめた。

「……………」

—また、戦争に行け！ といわれたら……。

「ようせんわ」

—でも、行く気はあるんでしょ。

「ない」素っ気ない声は、ひどく現実的だった。

—戦争は好き？

坂さんは、ブイと顔をそむけた。

—戦場で突撃する時、怖かった？

「いいや」

—天皇陛下は、好き？

「……………」

坂さんは、鼻をかすかに鳴らした。

（『さすらいの〈未復員〉』一七五〜一七六頁）

白衣の医師の姿を眼にすると「軍医殿！」と敬礼をする「重症の患者」である彼の取材の後、吉永は「あの人は、ひよつとして何もかもわかっていて、振るまつているのではないか」という疑念がふと心に湧いたという。一般に〈未復員〉の人たちにとつて「天皇」という存在は絶対的だとされているのに対し、この患者

の反応がその型にあてはまらなかったためだろう。

さらに、吉永らTBSの番組スタッフはある〈未復員〉の帰郷シーンの撮影を企画、担当医師の協力を得て一泊の帰郷を実行する。後日、吉永はその〈未復員〉から帰郷の感想をききながら、故郷の島で生活したい気持がある一方で、「兄さんの家ですから」「兄さんの厄介になるより、東京に帰った方が、自分としてはいい」と語る彼に、次のような質問を試みる。

—そうすると、故郷に帰って、住みつく気持はないわけですか……。

私は、彼の中に、一歩踏み込んだ。

「ええ、職が東京でみつかったら、東京に住みたいと思いません」

—でも、話は戻るけど、お兄さん達から「もつと泊って行け！」「と言って欲しくはなかったの？

私は、更に足を踏み入れた。

「うーん……。自分からも、そんな気持は示さなかったし……。兄さんが、皆と帰った方がいいよ」と言うんで（略）

—早く東京へ帰りたいくなったの？

「はい。早く帰った方が、いいと思いました」

（略）

—これから、どうします？

「はい……もう……国の厄介になる他、仕方ないですねえ……」

てつ太さんは照れたように笑った。

『さすらいの〈未復員〉』一三〇—一三四頁

帰郷したくてもできない〈未復員〉たちの厳しい現状とそれゆ

えに募る故郷への思い、というテーマに焦点を当てて番組制作を進める吉永の質問の仕方には、そのモチーフにもたれて少々誘導尋問調に陥っている感も否めないが、ともあれ以上のやりとりからは、この〈未復員〉が自分の置かれている立場について、社会的、客観的に判断していることがうかがえる。

ところで、「二時は賈の気遣ひではないかといふ噂もあつた」という「遙拝隊長」の悠一のために、この〈未復員〉たちのインタビューから、次のようなことが言えないだろうか。彼は、戦争体験が頭から離れないから病んでいる、というわけではない。何らかの障害から戦後社会に順応することができないために、唯一、かつて自己同一化を可能にしていた従軍生活、滅私奉公の生活に、未だ依存しているのだ、と。だとすれば、彼は「気遣ひ」というシエルトーの中で、自らについて語るといふ行為を放棄することによって、彼自身を守り得ているのではないだろうか。

「玉音放送」の風景の中に、彼らの姿はどこにも見つけることができない。しかし、もし彼らがその風景の中にいたとしたら、おそらく「正統派」の涙を流したのだろう。そしてその涙を流した同じ目から、易々とウロコを剥がしてしまうような器用さを持ち得ない彼らが、あの「玉音放送」の風景の外側には確かにいたのだ。

【注記】

1 井伏鱒二「遙拝隊長」（「展望」一九五〇年二月号）。引用は『井伏鱒二全集第十四巻』（筑摩書房、一九九八年六月）より。

2 吉永春子「さすらいの〈未復員〉」（筑摩書房、一九八七年七月）。〈未復員〉については同書で「未復員」―未だ復員せざる人と書きますが、

いわゆる南方等にいる未帰還兵とは、違います。この人達は、戦争中、精神障害をおこした元兵士達です。今でも戦争体験が頭から離れない…。(一〇二頁)と説明されている。

3 拙稿「語らない復員者たち(上)」(九大日文01 二〇〇二年七月)

4 「屍の街」は、大田が被爆直後から書き始めた作品だが、一九四八年一月まで発表が延ばされたり、公刊時には一部削除されたりと、占領軍の報道管制を受けた。その後、一九五〇年五月に冬芽書房から完全掲載の単行本『屍の街』が刊行された。引用は、『日本の原爆文学』②大田洋子(ほるぷ出版、一九八三年八月)より。

5 「祭りの場」(「群像」一九七五年六月号)。この作品により、第一八回群像新人賞と第七三回芥川賞を受賞。

6 野呂邦暢との対談「昭和二〇年八月九日——芥川賞受賞「祭りの場」をめぐって」(「文藝界」一九七五年九月号)

7 津金澤聰編『戦後日本のメディア・イベント』(一九四五—一九六〇年)『世界思想社、二〇〇二年三月』所収。

8 竹山昭子『玉音放送』(晩聲社、一九八九年三月)三二頁。同書では、マイクの前に立った天皇が詔書を読み上げた後、技師の要請に応えもう一度収録しなおしたこと、「はじめて聞くお声で、しかも非常に特徴のあるお声だった。抑揚が急に変わるので、これでよいのかと夢中でメーターの動きや録音の状態をチェックしつづけた」という担当技師の談話、二人の技師が同時に収録し、二組の「玉音盤」を作成した技術的な状況など、収録の様子を詳しく説明している。

9 前掲書。

10 井伏鱒二「黒い雨」の解題は以下のとおり。初出「新潮」一九六五年一月号〜一九六六年九月号。ただし、連載開始から一九六五年七月号までの題は「姪の結婚」、翌八月号より「黒い雨」と改題。一九六六年十月、

単行本『黒い雨』として新潮社より刊行。引用は『井伏鱒二全集第二十三巻』(筑摩書房、一九九八年十二月)より。

11 吉沢久子『終戦まで』(鴨居堂書房、一九四七年一月)。引用は『昭和戦争文学全集14 市民の日記』(集英社、一九六五年七月)所収の抄録より。なおこの「解説」によれば、当時は著者の夫である古谷綱武の著作として出版された。「古谷氏が昭和十九年十月末、召集されて東京に去るにのぞみ、とくに依頼して日々の記録を残すよう求めた結果がこの日記となったものである。」

12 一九九五年三月二〇日に都心で発生した地下鉄サリン事件について、当時マスメディアの依って立つ、社会の善悪二項対立の図式に違和感を覚えた村上春樹は、被害者たちへ直接インタビューを試みた『アンダーグラウンド』講談社、一九九七年三月)。本稿で挙げているのは事件当時日比谷線に乗っていた、水産食品会社に勤める「片山博視」氏(当時四〇歳)のインタビュー。「もちろんサリンを撒いたという行為自体には怒りを感じます。しかし何が悪なのかということになったときに、ただ単にその本人を責めればいいのかというと、私にはよくわからない部分があります。「人間って弱いですから、どうしても頼れるものが必要なんです。そんなときにばつと答えを与えられると楽でいい。」「会社なんかでは楽なんです。何かあっても、それは上の人の責任になりますから。自分は責任を逃れることができます。とくに私なんかの世代には、そんな世代的な特徴があるかなって思います。だから彼ら信者がマインドコントロールされるという感覚も、わからないではないですよ。」(四二三〜四二四頁)

(九州大学大学院博士後期課程三年)